

学生への質問紙調査による保育内容「健康」教育方法の検討

A Study for the Nursery Education of Health by Student Questionnaire Survey

藤 田 一 郎
Ichiro Fujita

子ども発達学科で保育士、教師を志す学部2年生の科目「保育内容（健康）」の教育方法を検討する。方法として「子どもの保健」を受講する1年生に講義形式と内容に関する質問紙調査を行った。良かったという意見が多かったのは、講義テーマ関連の問題を考えてから動画を視聴して解答を理解することだった。将来保育士・教師、そして親として役に立つという意見も多かった。印象に残る動画は、感染予防に役立つ「手洗いの歌」、体験的理由の多い「食物アレルギー」や「自閉症物語」、そして「子育て方法」に関するものだった。この結果を参考にして、お手本となる習慣や態度を身に付けて子どもに教えるための教育を計画した。問題解決型学習、医療器具実演等の参加型学習を行って、健康を守るための保育・教育現場に必要な医学的話題を提供する。実習で体験する頻度の多い「発熱」「嘔吐下痢」「食物アレルギー」「気になる子ども」「子育て方法」を講義テーマとする。

1. 目的

保育所・幼稚園などの施設において行われている保育・教育は、保育所保育指針・幼稚園教育要領に基づいて運営されている¹⁾²⁾。保育内容は幼児の発達の側面から5つの領域に分かれ、心身の健康に関する「健康」、人とのかかわりに関する「人間関係」、身近な環境とのかかわりに関する「環境」、言葉の獲得に関する「言葉」、感性と表現に関する「表現」がある。

本大学では保育内容「健康」はオムニバス方式で行われており、①子どもの発育、遊びと運動、安全教育、②食育、基本的な生活習慣、③生理機能、健康管理に分かれている³⁾。今回私は③に関する講義の教育方法を検討する。

「健康」のねらいの一つに「健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付ける。」があり、その内容は「自分の健康に関心を持ち、病気の予防などに必要な活動を進んで行う。」である。日常生活で起こるけがや病気、健康診断など様々な機会をとらえて、幼児なりに自分の体を大切にしなければならないことに気づかせる。病気にかからないために大切な活動を自分か

らしようとする態度を育てることが必要である。

養育者に必要な専門的知識は、健康を守る方法やケガや病気への適切な手当についての理解である。健康への関心や態度を子どもとともに実践することで子どもたちの行動の中に少しずつ取り込まれていく。ただし子どもの家庭事情が異なるので、家庭との連携を図りながら育てていかなければならない。このような教育方針に基づき、学生への質問紙調査を参考にして保育内容「健康」の教育方法を検討する。

2. 方法

対象は福岡女学院大学人間関係学部子ども発達学科1年生、「子どもの保健Ⅰ（各論）」受講者2012年度131名、2014年度135名である。授業では、講義テーマ関連の文章問題3問について学生は教科書を参照しながら10分間くらい考えた。その後学生に質問やヒントを与えて討論しながら答えに導いた。その後テーマ関連の動画（5分～20分）を1つまたは2つ視聴した。教科書を音読して専門用語を解説し、パワーポイント画面を見ながら小児科医としての体験談をまじえて説

明を補足した。15回の講義テーマは「子どもの保健」に関するいくつかの本を参考にして構成した⁴⁾⁵⁾。

講義の最終日、質問紙で調査を行った。質問①この講義の形式、内容に関する意見を書いてください。多くの学生が1つか2つの意見を書き、2012年度188、2014年度175の計363の回答があった。この意見を良かったこと、改善すべきこと、授業形式、授業内容で分類した(表1)。

質問②講義中に見た動画のなかで印象に残るものはどれか。その理由も書いてください。質問紙の動画名称一覧から選択する形式で、学生は1つか2つ選択したので、2012年度144、2014年度158の回答があった。学生の選択理由のうち、自分や家族、友人と関係があるなどの強い動機があるときは体験的理由ありと考えた。

次に、子どもの保健関連の卒業研究を行っている4年生8名に質問紙調査を行った。卒業後は小学校教員2名、講師2名、保育士2名、大学院生1名、企業1名と教員・保育士の割合が多い学生である。3年前の「子どもの保健」講義で見た動画のなかで印象に残るものと、保育・教育実習で役立ったと思う講義内容を質問紙の一覧から選択し、理由とともに回答した。

上記の調査結果を参考にして、保育所保育指針に基づいて保育内容「健康」の講義5回に関して、授業形式と内容を考案した。

3. 結果

①この講義の内容、形式に対する感想・意見を書いてください(表1)。

授業形式に関する学生の意見で良かったことを引用する。「とても頭を働かせる、考えさせられる授業でした。」「はじめ自ら考え、その後に解説があるので、分かることの喜び、学ぶことの大切さを実感できる。」「大事なところが分かりやすく、とても楽しい授業でした。」「学生に質問するので参加型授業で良かったと思う。」という肯定的な意見が多く書かれていた。ほかに、「実際の患者さんの話を聞いてリアルで分かりやすかった。」などがあった。

授業内容に関しては、「間違っている自分の知識に

表1 講義に関する学生の意見

意見	回答数
1. 良かったこと	
①授業形式	
初めに3つの問題を考える	74
問題について教科書で調べる	16
問題について学生と討論する	6
問題と関係のある動画を見る	99
パワーポイントが分かりやすい	7
教科書を音読する	5
講師の体験的解説がある	9
②授業内容	
講義ごとのテーマが明確である	7
今の自分に役立つことがある	18
自分や家族の病気を振り返る	6
将来保育士・教師として役立つ	70
将来母親として役立つ	21
2. 改善すべきこと	
①授業形式	
問題の解答を板書してほしい	5
配布資料を作ってほしい	2
学生の私語が多い	9
座席前方の学生が質問されやすい	2
②授業内容	
専門用語が難しい	4
内容の進み具合が速い	3
計	363

気付いた。」「自分もかかるかもしれない病気を知って、これからの生活に役立つと思った。」「保育士は命を預かる仕事だということに気付いた。」「赤ちゃんについてもっと知りたいと思った。」など、学習意欲を促す動機づけとなる感想が聞けた。「自分が子どもの頃、病気にかからないように親から予防してもらっていたことが分かった。」のように、自分や家族の歴史を振り返る良い機会にもなっていた。嬉しかった意見として、「私の趣味でお話を聞いている感じだった。」というのがあり、学生にとっても関心の高いテーマが多かったようだ。参加型授業として2014年度は聴診

器6本を学生に回して服の上から心音を聞いてもらった。「実際に聴診器に触れることができ貴重な体験だった。」という声があり、今後は保育内容「健康」授業で行うことにした。

改善すべきこととして、「板書された問題の解答を書き写したい」という意見があったが、講義に集中して解説を聞き落すことがなければ問題ないと判断した。「配布資料」に関しては、2015年度は教科書を指定せず、配布資料を使用した。2012年度は私語が多くて対応に苦慮していたが、真面目な学生も困っていたことが分かった。私語をしても興味のある場面では画面に集中するので、動画内容の変更を試行錯誤した。座席指定にすれば私語が減ることを学生が教えてくれたので、座席指定にしたところ2014年度は私語の問題はほとんどなくなった。また、講義テーマ関連の問題を座席前方の学生に質問することが多かったので、2014年度は8回目の講義で席替えを行った。「動画が見やすくなった。」など良かったという意見があった。

②講義中に見た動画のなかで印象に残るものはどれか(表2)。

選択者数の多かった動画について説明する。「手洗いの歌」は、お願い、カメさんの歌詞で始まる覚えやすいメロディーで、50秒というちょうど良い時間である。テレビのコマーシャルで流れた影響もあり、「覚えた。子どもに教えた。」という声が多かった。2012年は牛乳アレルギーの女儿がチーズ入りのチジミを食べてアナフィラキシーショックで死亡した事件があった。やはり関心が高くなるらしく、この年の「食べて治す食物アレルギー」選択者数が2014年度よりも多かった。

心理的な話題では、全盲のピアニスト「辻井伸行さん両親の子育て」の選択者数をもっとも多かった。「褒めて育てるのは難しいと思っていたけど、いい刺激になった。」「辻井さんの動画を見て思わず涙が出た。」など、子育て方法に関する関心はかなり高かった。

「光とともに(自閉症物語)」はその特徴的な個性や社会的現実を伝えるとともに、作家が描き始める動機を紹介するものである。「小学校時代の好きな漫画だった。衝撃を受けた。」「自閉症の家族や同級生がい

た。」などの体験的理由が多かった。「摂食障害の事例」は拒食症になったきっかけや入院患者の食事の様子を伝えて、ダイエットの危険性を訴える映像である。「自分も気を付けようと思う。」という感想があった。

最初の講義で見たにもかかわらず印象に残ったのが「赤ちゃんの視覚、記憶」の映像である。生まれたばかりは近くをぼんやり見ているが1か月、2か月と視覚が発達していくことを学生はよく覚えていた。「人に預けられた幼児の変容」は乳児院に突然預けられた17か月児の行動を観察するもので、親子関係が変わってしまうことに衝撃を受けた学生が多かった。

ほかにも、「自分もアトピーがあるので勉強になった。」「自分が幼少時代に落ち着きがなく注意欠陥が激しかった。」など、体験的理由で記憶に残っている動画もいくつかあった。

③4年生への質問紙調査

この調査は「子どもの保健」講義終了して2年半経過し、保育・教育実習を終了した学生8名の意見である。動画のなかで印象に残ったのは、手洗い8、食物アレルギー4、アトピー性皮膚炎1、人に預けられた幼児の変容1、辻井伸行さん1であった。「子どもと一緒に歌って手を洗った。」「食物アレルギーで死亡のニュースが衝撃的だった。」などの感想があった。保育・教育実習で役立ったと思う講義内容は、アレルギー疾患5、けいれん2、子どもの急病1、発達障害1、カウンセリング1、親子の愛着パターン1であった。「実習のとき食物アレルギーの子どもの給食に気を使った。」「けいれんを起こした子どもがいた。」「発達障害の子どもがいた。」などの理由があった。

④保育内容「健康」講義形式と内容の検討(表3)

上記①、②、③の結果をもとに保育内容「健康」の授業形式と内容を検討する。授業形式に関しては教育内容の向上を目指して「保育・教育現場に必要な医学的課題」を各年度で検討して選択する。食物アレルギーのようにその年に話題となった内容を取り上げれば学習意欲が向上する。また、保育・教育現場で説明するための手掛かりを与えたいので、子どもに分かる医学的説明の工夫を意識して配布資料やパワーポイント

表2 印象に残る動画の選択と理由

講義の内容	動画の内容	2012年度		2014年度	
		選択数	体験的理由	選択数	体験的理由
1. 赤ちゃん	赤ちゃんの視覚、記憶	11	0	7	0
	出産、新生児処置	2	0	1	0
2. 社会性の発達と発育	親子の愛着パターン	1	0	1	0
	人に預けられた幼児の変容	11	0	5	0
3. 運動発達と先天性疾患	乳幼児の運動機能の発達	0	0	0	0
4. 急病時の対応	家でできる急病時の看護	3	0	3	0
5. 応急手当と事故	外傷時の応急手当	1	0	2	0
	心肺蘇生法、AED使用法	2	1	7	0
6. 感染症	麻疹脳炎と予防接種	0	0	0	0
	病原性大腸菌の食中毒	0	0	0	0
7. 感染症の予防	インフルエンザ予防	3	2	1	0
	手洗いの歌	22	1	30	0
8. 食物アレルギー	食べて治す食物アレルギー	18	5	6	1
	アトピー性皮膚炎の症状	4	4	1	0
9. おもな病気	白血病の治療	0	0	0	0
10. 発達障害	光とともに（自閉症物語）	20	8	23	13
	注意欠陥多動性障害の症状	1	1	2	2
11. 心身症	心身症の成因	2	0	0	0
	摂食障害の事例	11	3	23	1
12. カウンセリング	不登校生徒の家族療法	1	0	1	0
13. 神経・精神疾患	てんかん発作で事故	0	0	0	0
	産後うつ病の事例	3	0	6	0
14. 子どものしつけ	辻井伸行さん両親の子育て	23	5	37	8
	前向き子育てプログラム	5	0	2	0
回答数	計	144	30	158	25

トを作成していく。2015年度3年、4年ゼミ生が作成した「保育士に伝えたい子どもの病気」資料集を活用する。

学習意欲の推進には参加型授業が効果的なので、グループワークによる問題解決型学習を行う。子どもの様子や症状を提示して考え得る理由をあげて討論を行いたい。

授業内容に関しては、園や学校で遭遇する頻度の多いこと、学生が関心のある内容を選択する。まずは風邪の話を含む発熱時の対応が重要な内容である。小児科医としてこれまで頻回に保護者に説明してきたことであり、養育者に啓発していきたい内容である。水痘などの発疹性疾患も知っておくと役に立つ。

次に園や学校で流行しやすい嘔吐下痢症の予防（と

表3 保育内容「健康」教育で取り組むこと

<p>1. 授業形式</p> <p>① 教育内容の向上 保育・教育現場に必要な医学的課題の選択 子どもに分かる医学的説明の工夫 保育士に伝えたい子どもの病気資料集</p> <p>② 参加型授業による学習意欲の推進 問題解決型学習（グループワーク） 問題に関する質疑応答 音読による専門用語の理解 エピペン、聴診器等の実習</p>
<p>2. 授業内容</p> <p>① 発熱時の対応と発疹の鑑別診断 聴診器使用法の練習</p> <p>② 嘔吐下痢の対応と予防 手洗いの練習</p> <p>③ 食物アレルギーの症状と対応 エピペン使用法の練習</p> <p>④ 気になる子どもの鑑別診断 問題解決型学習</p> <p>⑤ 子育て方法 問題解決型学習</p>

くに手洗い) について身に付けてもらう。最近のトピックとして食物アレルギーは欠かせない。アレルギー治療薬エピペン使用のための器具を用いて実習を行う。さらに、発達障害や心身症症状など気になる子どもの理解と対応、保育士が困ることの多い保護者との相談に役立つ子育て方法のグループワークを行う。

4. 考察

はじめに「子どもの保健」講義に関する質問紙調査について考察する。保育教育において重要なのは学んで実践して身に付けることであり、手遊び、歌、ピアノ、工作、運動などの技術習得に学生は励んでいる。ある時は童心に帰って体験的に学ぶことができる。しかし健康教育はどうだろう。病気について学んで理解しても体験することはできず、学生自身の経験者も少ないはずだ。机上の学問にならないためには学生に

とってより体験的な学習方法を工夫するべきである。

養育者は子どもに健康管理の習慣がつくような意欲を促す関わり方を行わなければならない。感染予防の例を考えてみる。砂遊び後におやつを食べるとき、「手が汚れたからから洗いなさい」より、「手にばい菌が付いているから洗いなさい」の方がいいのだろうか。詳しく教えても理解できないこともある。しかし養育者自身はその意義をきちんと理解しておくべきである。

嘔吐下痢症のウイルスは感染しやすく、園や施設で集団発生することがある。感染者の吐物や下痢便がわずかに触れただけで、つまり少量のウイルスを摂取するだけで容易に感染してしまう。ふだんは子どもがおもちや、指をなめても大丈夫なのに、嘔吐下痢症の流行時には十分な手洗いを頻繁にする方が良い。このような感染症の特徴を知っておくと役立つのだが、養育者自身が体験学習を行うには限界がある。そこで筆者は毎回の講義で分かりやすい動画を使って説明を行っている。そして教科書的な解説ではなく、実体験つまり事例をできるだけ紹介している

調査結果から、動画視聴がかなり効果的な学習方法であり、問題の答えの理解が深まることが分かった(表1)。印象に残る動画は「食物アレルギー」「自閉症物語」「子育て方法」が多く、自分や家族を振り返る体験的な理由が多かった(表2)。子どもの保健では子どもの身体だけでなく心の病気についても教えているが、学生自身も心の病気に関する授業への関心が高かった。

講師の経験にもとづく事例の補足説明については、学生の記述に「理解が深まった」という表現が多かった。著者は感染症など一般的な小児医療を習得して新生児医療を担当し、近年は産後うつ病、心身症、不登校の診療を担当している。そのため従来の小児医学で病気を診るだけでなく、精神疾患、心身症、カウンセリング、家族療法などを学び、子どもを心身ともに、家族や教育現場を含めて包括的に理解して対応している。例えば、病気で子どもにどのような症状が生じるかだけでなく、そのために子どもがどのように困り、家族や学校がどのように対応するべきかを考えている。

子ども発達学科では「子ども学」の視点から講義科

目を構成しており、子ども観察の講義と、子どもがいるフィールドでの観察演習が行われる。子どもの保健でも心身の病気を予防し、早期発見につながる子ども観察の場面を想定して動画を視聴している。「突然乳児院に預けられた17か月児」などである。ストレスによって発症しうる心身症の事例として紹介しているが、子どもを丁寧に観察して気持ちを理解することを教えている。

動画視聴の次に賛成意見が多かったのは講義の冒頭に問題を考えて討論することであった。「はじめ自ら考え、その後に解説があるので、分かることの喜び、学ぶことの大切さを実感できる。」という学生の意見からも、このような参加型の形式が有効なことが分かった。将来保育士や親になったときに遭遇する頻度の多い講義テーマを選択しているのも、学生にとって学習意欲のわく問題回答の時間だと思う。将来の保育士・教師、そして親としても役に立つ講義だったという学生の意見も多かった。そして学生のなかには自身の子どもの時代のこと、例えばアレルギー疾患や家族のことを思い出し、自分理解を深めていた。そのような講義を受けて良かった、動画を見てよかったという意見もあった。

4年生への質問紙調査は「子どもの保健」講義終了後2年半経過した時点であり、保育・教育実習終了後の意見である。印象に残る動画と実習で役立つ講義内容の結果は1年生の調査結果に合致するものであった。したがってこれらの結果を参考にして保育内容「健康」の講義形式と内容を考案した。はじめ述べたように保育所保育指針における保育内容「健康」に基づいており、学生自身が身に付けるという観点から検討した結果である。

表3に記載した保育内容「健康」教育での取り組み

について考察する。学生が問題意識をもつように説明する、楽しく学べるという両方を考えて教育を行う。大学生への教育であるが、学生が子どもに教えるという場面を想定しなくてはならない。楽しく学べるという子ども向けのロールプレイング的側面を広義の一場面に付け加えたい。この点が通常の医学教育とは異なる。医学では病気の概要を理解することが中心だが、保育教育では環境調整だけでなく子どもに教えることが多いからである。つまり、保育内容「健康」の講義では、子どもを対象とした健康教育と病気の解説と、子どもに教える方法を考える内容を柱とすべきと考えられる。3年、4年ゼミ生が作成した「保育士に伝えたい子どもの病気資料集」も活用できると思われる。

授業では小児医療、園・学校の最新情報をもとに保育・教育現場に役立つ話題を提供する。保育・教育現場を想定した問題のグループワークによる参加型授業を行う。感染症やアレルギーなどの身体疾患だけでなく、発達障害、心身症、子育て方法など心の問題も学生とともに考える。このような方針で教育を行い、学生の評価を得ながら再検討していきたい。

5. 文献

- 1) 保育所保育指針解説書 厚生労働省編 フレーベル館 2015
- 2) 幼稚園教育要領解説 文部科学省 フレーベル館 2014
- 3) 渡邊晴美：保育内容「健康」の教育内容と方法に関する一考察 福岡女学院大学紀要 第16号 47-53
- 4) 池田行伸、藤田一郎、園田貴章編：子どもの発達と支援 医療、心理、教育、福祉の観点から ナカニシヤ出版 2012
- 5) 田中哲郎監修：子育て支援における保健相談マニュアル 日本小児医事出版社 2009